

吉尾雅春 編

症例で学ぶ脳卒中のリハ戦略【Web 動画付】

原 寛美（東京リハビリテーションセンター世田谷）

脳卒中のリハビリテーションに携わっていて、日々感じていることがある。それは脳卒中患者さんの障害像はすべからく異なっており、定型化されたパターンで予後を論じることは困難であるという点である。さらに、進化してきているリハビリテーション医療・医学の知見と方法論を導入することで、障害像への新しい援助の介入が可能となってきた点である。

本書籍の編集者の吉尾雅春氏（千里リハビリテーション病院・副院長）は、理学療法士として長らく臨床における実績を積んだ後に、札幌医大解剖学第二講座に在籍して神経系を含めた解剖学的知見を修得し、キャリアアップをされている。本書においてはその経験がいかに発揮されており、現在の千里リハビリテーション病院において指導している後進の手で執筆されている。

二部構成であり、前半は「脳のシステムを学ぶ」と題して、神経機能解剖と臨床症状の解説編である。後半は「症例」編であり、脳画像から障害像を考えて分析するプロセスと、生活期までを俯瞰して援助を継続したりハビリテーションの軌跡が詳述されている。

「脳のシステムを学ぶ」では、基本となる解剖学的知見と機能局在のみならず、脳卒中リハビリテーションでは必須となる脳内神経ネットワークにも丁寧な記述が網羅されている。それらの病変によって生じる脳卒中例の臨床症状と関連付けた解説がされていることが特徴である。大脳皮質と皮質下核、小脳、脳幹における、入力系と出力系と血管支配、臨床症状について、詳しく分析されていて、他の著書

では得ることができない新しい知見を学ぶことができる。そしてカラーで明瞭に図示された脳内の局在とネットワークがわかりやすい。

「症例」編では、全例で脳画像の分析の進め方とその障害像のプロブレム・リストの記述がされている。それらに依拠したりハビリテーションの目標設定と、実際のリハビリテーションの経過が、回復期リハビリテーションの期間だけではなく、退院後の生活まで含めて詳細に記述されている。さらにQOLのレベルまで言及した分析がされている。回復期リハビリテーション病棟を退院後に、訪問リハビリテーションなどを継続して生活のフォローがなされ、初期の目標設定とリハビリテーションのアプローチが的確であったのかフィードバックがされている。脳卒中リハビリテーション医療とは、一人の患者さんの発症前とは異なる生活設計を、いかに援助できるかという原点を喚起させてくれる読み応えある内容となっている。回復経過を評価尺度の数値でもって論じていることが多い日常であるが、本書においては数値だけにとどまらない著述的な描写が徹底されている。若いリハビリテーションスタッフがそうした視点で仕事をしていることに驚くとともに、評価尺度にとどまらない観察を教示する内容に衝撃を受けることができた。

本書が、脳画像を読み解く教科書であるとともに、脳卒中リハビリテーション医療の本質を学ぶテキストとして活用されることを望みたい。

（B5 頁224 2018年 定価4,000円＋税[ISBN978-4-260-03683-2] 医学書院刊）